



ボードレールとマネ関係資料

吉田, 典子

(Citation)

近代, 118:27*-58*

(Issue Date)

2018-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011245>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011245>



ボードレールとマネ関係資料

吉田典子

はじめに

ここに掲載するのは、詩人・美術批評家のシャルル・ボードレール（1821-1867）と画家エドゥアール・マネ（1832-1883）の交友関係と、それに関連する両者の作品について、現在確認できる資料や情報を年代順に取りまとめたものである。参照した文献については、本稿の末尾に略号とともに記載している。引用文については、その都度本文中に、出典の略号とページ数を記載している。二人の関係に関わる事項（書簡を含む）については◆の記号によって原則として年代順に示し、作品については◎の記号で示した（年代については不明のものもあり、必ずしも時系列ではない）。以下に、二人の関係についての概要を示しておく。

多くの二次文献や年譜などで、二人は1858-59年頃に、ルジョーヌ少佐夫妻のサロンで出会ったと記載されていることが多い。イポリット・ルジョーヌ少佐（le commandant Hippolyte Lejosne, 1814-1884）は、第二帝政下の軍人でありながら、共和主義思想の持ち主でヴィクトール・ユゴーの信奉者であり、自ら詩を書くなど文芸を好み、モンマルトルのトリュデーヌ大通り6番地にあった夫妻のサロンには文学者や芸術家、共和派の政治家が集まっていた。またルジョーヌ少佐はもともとマネの家族の友人であり、ボードレールはその後もルジョーヌ少佐と親しい関係を続けているので、二人が彼らのサロンで出会ったという点については蓋然性が高い。

しかし、1858-59年という年代については、疑問視する向きもある。この年代は、マネの古くからの友人アントナン・ブルーストの書いた『マネの思い出』

のなかに、マネの《アブサントを飲む男》が1859年のサロンに落選した通知が届いたとき、ボードレールとプルースト自身はマネのアトリエにいたというエピソードに基づいていると思われる。タバラン¹が二人の出会いを1859年頃のこととしたのも、プルーストの記述によるのではないだろうか。

実は、資料の中でもっとも取り扱いが難しいのは、この『マネの思い出』の中の記事である。この文献は、1897年に〈ルヴュー・ブランシュ〉誌に掲載された後、1913年に単行本として出版されたもので、両者のあいだには異文がかなりある。アントナン・プルースト (Antonin Proust, 1832-1905) はマネのコレージュ・ロラン Collège Rollin 時代から同級生の古い友人で、トマ・クーチュールのアトリエに入ったのも一緒だった。プルーストはその後、共和派のジャーナリスト・批評家・政治家となり、ガンベッタの私設秘書をつとめ、短命のガンベッタ内閣 (1881年11月～1882年1月) ではフランスで初めて設置された芸術大臣 ministre des Arts を務めることになる人物である。マネは1880年のサロンに彼の肖像画を出品している。プルーストはマネとボードレールについてのいくつかの興味深いエピソードを書いているが、それらは作品や書簡等によって推察される両者の関係と矛盾する点を多く含んでいるのである。

プルーストは『マネの思い出』のなかで、自分たちがクーチュールのアトリエにいた頃、毎日、ミュルジュール、バルベール・ドルヴィイ、ボードレールと一緒にロティスリー・パヴァールで昼食をとっていたとも書いているが、マネがクーチュールのアトリエで過ごした時代は1850-56年頃なので、これを信じるならばマネとボードレールの出会いはもっと以前にさかのぼることになる。このアントナン・プルーストの記述はきわめて具体的なのだが、執筆されたのはプルーストが65歳になってからのことであり、慎重に取り扱う必要があるだろう。

ステファヌ・ゲガン²は、もしプルーストが言うように、《アブサントを飲む男》が1859年のサロンに落選した通知が届いた頃、ボードレールがマネのアトリ

エに出入りしていたのなら、その直後にボードレールが執筆した『1859年のサロン』にそれについて何の言及もないのはおかしいと指摘する。そもそもマネが《アプサントを飲む男》をサロンに応募したかどうかについても、何の証拠も残っていない。1867年のマネの個展の際に作られた目録の序文には、「1861年以来、マネ氏はサロンに展示し、また展示しようと試みている」という記述がある。また、ゲガンによれば、ボードレールが1859年5月16日、サロンが開幕して1ヶ月後にナダールに書いた長い手紙の中にもマネへの言及はない。

一方、ボードレールの全著作のなかで、はじめてマネの名前が出てくるのが1862年4月後半の「^{エッチング}腐蝕銅版画は流行中」（『逸話評論』誌）のごく短い記事である。ここで、ボードレールはホイッスラー、メリヨン、次いでルグロ、ボンヴァン、ヨンキントについて、2～3行ずつコメントした後、「アンドレ・ジャンロン、リボ、マネの諸氏もまた、腐蝕銅版画の試作数点をこころみたところであり、それらもまたカダール氏がリシュリュー通りの彼の店の陳列窓に請じ入れるところとなった」と書いているだけである。もしマネをよく知っていたなら、少なくともルグロと同等のコメントは加えたであろう。

しかし、同年9月14日の「画家たちと腐蝕銅版画家たち」（『ブルヴァール』誌）では様相が一変する。これもそれほど長くない評論であるが、ボードレールは腐蝕銅版画について語る前に、フランス絵画の状況を概観している。ロマン主義の開花以来、「すべてのフランス派の栄光は、数年にわたって、ただ一人の人物のうちに集中しているかに見えた」。すなわちドラクロワである。しかし、「その豊饒さと精力がいかに大きなものであろうと、他の者たちの貧しい分まで、われわれを慰めるのに十分ではなかった」。そして、小ぎれいな絵やもったいぶった大作などが君臨していた時に、クールベの絵が現れて人気を博したのだった。「クールベが、単純さや率直さに対する嗜好と、絵画に対する無私で絶対的な愛を回復するのに少なからず貢献したことを認めなければならない」とボードレールは客観的な評価をする。そして、このようにドラクロワ、

クールベという2人の巨匠の名を挙げた後で、「さらにもっと最近、まだ若い他の2人の画家が、並外れた力強さをもって、姿を現した」と書いて、ルグロとマネの名前を挙げるのである。ルグロは、《お告げの祈り》(1859)、《^{エクス・ヴオ}絵馬》(1860)などの「貧しい教区の人々の悲しく諦めたような信仰心」を表現した「力強い作品」で記憶される。一方の「マネ氏は、この前の官展(サロン)で激しいセンセーションを巻き起こした《ギター弾き》の作者である。次の官展では、最も強烈なスペインの風味を帯びた彼のタブローが何点も見られることだろう」と述べる。

クロード・ピシヨワは、この1862年4月の記事と9月の記事の相違から、ボードレールはこの年の春から夏のあいだに、マネのアトリエを訪れたのだろうとして、2人の出会いを1862年のこととしている。もしそうであるとすれば、1859-60年に執筆されたと考えられる「現代生活の画家」(発表は1863年)の主人公がコンスタンタン・ギースであって、マネではないのは当然のこととなるだろう。

いずれにせよ、ボードレールが美術批評の中で記した唯一のマネに対する評価を読むことができるのは、この〈ブルヴァール〉誌の記事においてである。上記の引用は以下のように続く。「マネ、ルグロ両氏は、現実、すなわち現代の現実に対する断固たる嗜好をもち、— これだけでもすでに良い徴候なのだが—、この嗜好に、活発、また広闊で、敏感で、大胆な想像力を結びつけているのであって、この想像力というものなしには、この上もなく優れた諸能力のすべても、主人なしの召使い、政府なしの官吏にすぎないと、ぜひとも言うておく必要がある。」これは、「現代の現実への嗜好」と「想像力」、いわばクールベとドラクロワを結びつけた、ボードレールとしては最上級の賛辞である。

実際、ボードレールとマネの協働とも言える作品群が生み出されるのは、1862年から1864年初めにかけて(ボードレールは1864年4月にベルギーへ移る)のさほど長くはない期間である。直接的な関係を示す作品に限って挙げる

ならば、マネは《テュイルリーの音楽会》で、ボードレールの姿を描き入れ、他に《帽子をかぶった横顔のボードレール》のエッチング2点、《無帽の正面像のボードレール》のエッチング3点、《エドガー・ポーの肖像》の墨によるデッサンとエッチング、《横たわるボードレールの愛人（ジャンヌ・デュヴァルの肖像）》の油彩および水彩を残している。一方ボードレールは、上記の評論の他に、マネの《ローラ・ド・ヴァランス》の銘として4行詩を制作し、散文詩「紐」をマネに捧げている。

一方、書簡について言えば、現存する最初の手紙は、1863年1月4日のもので、これはボードレールがマネに1000フランを借りた借用証書である。次に同年3月28日にマネの母親に宛てて、招待を受けたことへの丁寧な礼状がある。ボードレールがマネの家を訪れ、家族とも知り合うようになったのは、この時からだと思われる。また、同じ1863年10月6日の写真家カルジャ宛の手紙では、マネがその日の夜、オランダに出発し、彼の「妻」を連れ帰るという話を聞いて、驚いたことが記されている。彼女がピアニストだということも知らなかったようである。マネが自分たち兄弟のピアノ教師としてやってきたオランダ人女性シュザンヌ・レーンホフと出会ったのは1849年であり、シュザンヌの「弟」でマネの「名付け子」であるレオンが生まれたのは1852年である。シュザンヌはずっとマネ家の一員として暮らしていたが、正式にマネとシュザンヌが結婚するのは、1863年10月28日、オランダでのことである。マネは1862年にボードレールの愛人ジャンヌ・デュヴァルの肖像を書いているが、彼の方はこの時まで、ボードレールにシュザンヌの存在を知らせていなかったことがわかる。

1863年は《草上の昼食》の年である。落選者展は1863年5月15日に開幕し、マネの絵はスキャンダルを引き起こしたが、そのことについての言及は一切残っていない。それに対して、マネが1864年のサロンに送った2点《闘牛のエピソード》と《死んだキリストと天使たち》に関してボードレールは、当時美術総監としてサロン展の責任者となっていた昔の友人（フィリップ・ド・シェ

ヌヴィエール侯爵)に、サロンで良い場所にかけてくれるように手紙で頼んだり、キリストが受けた傷は左胸ではなく右胸であることを注意したりするなど、保護者のように世話を焼いている。この年のサロンには、ファンタン＝ラトゥールの《ドラクロワへのオマージュ》も出品された。この集団肖像画にはマネとボードレールも描かれていて、この頃の2人の風貌と交友関係を伝えている。

しかし、ボードレールは自身の目で1864年のサロンを見ることはできなかった。同年の4月末に詩人はパリを離れ、ベルギーに行ってしまうからである。その後は二人の間に何度か手紙のやり取りがある。ボードレールはマネにパリでの仕事上の交渉を頼み、ベルギーでの生活や仕事や健康状態への不満をかこち、ユゴーに対する本心を述べるなどもっとも信頼できる打ち明け話の相手に選んでいる。1865年のサロンで《オランピア》が非難の嵐を巻き起こしたとき、マネはボードレールに「あなたがここにいて下さればと思います。罵詈雑言が雨あられと降りそそぎ、僕はかつてこんな素晴らしい目に遭わされたことはありません」と嘆き、「私のタブローについてのあなたのまともなご判断がいただきたかった」と訴えている。それに対するボードレールの返答が「あなたは、あなたの芸術の老衰のなかでの第一人者にすぎないのです」という有名な言葉である。これにより、クロード・ピシヨワをはじめ多くの人々は、ボードレールはマネに大きな友情を抱いてはいたが、ドラクロワに匹敵するような賛美の念は抱いていなかったと結論づける。

しかしながら、この文章は全体の文脈の中で理解する必要があるだろう。ボードレールは、シャトーブリアンやワーグナーもかつて嘲弄的になったことを指摘する。しかし、彼らは「それぞれのジャンル」で、「そのきわめて豊かな一世界」の中でかがみの鑑であるに過ぎない。ドラクロワもまた、そうした世界の住人であるだろう。それに対して、ボードレールは近代の絵画は、自身のジャンルである詩と同様に、「老衰」の状態にあるという認識から出発している。『1846年のサロン』においてすでにボードレールは「偉大な伝統は失われてしまい、

新しい伝統はまだできていない、というのは本当だ」と書いていた。ボードレール自身、「自分の芸術の老衰（＝詩の老衰）のなかでの第一人者」であることを自負していただろう。ボードレールはマネと、近代における芸術についてのこのような認識を共有していたと考えられる。この問題については、拙論「ボードレールとマネ—散文詩『紐』を中心に」でも考察したので参照されたい³。

* * * * *

◆ 1858-59年（?）、ルジョーヌ少佐夫妻のサロンで出会う。

・タバランは『ボードレールの時代の芸術生活』のなかで、次のように書いている。

ナダールとテオフィル・ゴージェを介して、彼[ボードレール]はルジョーヌ少佐と知り合った。少佐は元トマ・クーチュールの弟子である27歳の画家エドゥアール・マネの家族の友人だった。マネ氏はクリシー通り69番地に両親と一緒に住み、ラヴォワジエ通りにアルベール・ド・バルロワ伯爵とアトリエを共有していた。[動物画を得意としたバルロワの《待ち伏せするキツネ》は1859年のサロンに入選したが、マネの処女出品作《アブサントを飲む男》は落選した。]ボードレールは、ラヴォワジエ通りの常連になったが、そこにはクーチュールとピコのアトリエの悪童連中が集まり、学士院の肅正者たちの悪口を言っていた。(Tabarant1963:261)

・イポリット・ルジョーヌ少佐 (le commandant Hippolyte Lejosne, 1814-1884) は、理工科学校および参謀本部学校 (l'Ecole d'état-major) の出身で、1859年4月にマニャン元帥の副官、同5月に中隊長に任命される。1861年9月30日から1870年3月2日まで、パリ要塞参謀本部 (l'Etat-major de la

place de Paris) に所属していた。

・1847年8月ヴァランティーヌ・カザリス (Valentine Cazalis) と結婚。夫人はマラルメの友人アンリ・カザリス (ジャン・ラオールの筆名で知られる) の親戚。

・夫妻は、トリュデヌ大通り6番地の自宅で、文学者、芸術家、共和派の政治家などが集まるサロンを開いていた。サロンに出入りしていたのは、ドラクロワ、テオフィル・シルヴェストル (ドラクロワが好んだ美術批評家)、ブラックモン、マネ、バルベール・ドールヴィイ (以上 *CPI*, II; PZ)、ナダール、テオフィル・ゴージェ (以上 Tabarant1963) などである。ピエール・ブルデュエは、マネにおける「社会資本」の蓄積の場所としてのルジョヌ夫妻のサロンの重要性を挙げ、マネがそこで出会った人々として、オーギュスト・プレオー (共和主義の彫刻家)、ナダール、ボードレル、ザカリー・アストリュック、そしてアストリュックを通してモネ、バルベール・ドールヴィイ、フレデリック・バジール (ルジョヌ少佐の甥)、エドモン・メートル、さらに共和主義者のガンベッタ、アンリ・ド・ラ・マドレーヌ、ポール・ムーリスらの名前を挙げている⁴。夫妻は、1869年3月に、帝政によって再演が禁止されていたユゴーの戯曲『リュイ・ブラス』を自分たちのサロンで上演した。

・ルジョヌは、その共和主義思想とヴィクトール・ユゴーへの賛美のため、1870年の戦争勃発の数ヶ月前に、アルジェリアのコンスタンティーヌに配置転換された。普仏戦争のあいだはそこに留まり、1874年に退役。

・ルジョヌは自身も詩人であり、かなりの数のソネを手稿で残している。(*CPI*, II: 1014)

◆アントナン・ブルーストによれば、マネの《アブサントを飲む男》が1859年のサロンに落選した知らせが届いたとき、「僕たち [マネとブルースト] は彼 [マネ] の家にボードレルと一緒にいた」。マネは落選を3日前から知っ

ていたと言い、ドラクロワがこの絵をいいと言ってくれたらしいことに慰めを見出す。ドラクロワ、クーチュール、クールベなどについてひとしきり話題になった後、次のような会話が交わされる。

「結論は」とボードレールは言った。「自分自身であらねばならないということだ。」

「僕はいつもそう言ってきたじゃありませんか、ボードレールさん」とマネは答えた。「僕が《アブサントを飲む男》において自分自身ではなかったとおっしゃるのですか。」

「うーむ、うーむ」とボードレール。

「おやおや、今度はボードレールが僕をけなそうとしている。みんなが寄ってたかって・・・」(Proust 1913 : 35)

◆同じくアントナン・ブルーストによれば、マネとブルーストがクーチュールのアトリエにいる頃、毎日、ミュルジュール、バルベール・ドールヴィイ、ボードレールと一緒に昼食をとっていた。

僕たちは毎朝、ノートル＝ダム・ド・ロレット通りのロティスリー・パヴァール⁵で、ミュルジュール、バルベール・ドールヴィイ、ボードレールと何人かのモンマルトルの文学者と一緒に昼食をとっていたのだが、店に行く途中でマネはパトロン [クーチュール] に悪態をついていた。

「自分の時代のドーミエだって！とにかく、自分の時代のコワベルよりはましじゃないか⁶。」(Proust 1913 : 22-23)

◆またブルーストによれば、ボードレールはマネに大きな影響を与えたと言われるが、実際は逆であったという。

ボードレールとも、マネは非常に親しい関係だった。彼はマネに大きな影響を与えたと言われる。実際はその逆だ。ロティスリー・パヴァールやレストラン・ディノショー⁷（この店は「フランソワ1世」と並んで文学者や芸術家のレストランと言われていた）に足繁く通って、これらの店でマネと会話し、また後にはディヴァン・ル・ペルティエ⁸でマネと長い時間を過ごしたことは、彼のものの見方や判断の仕方を明らかに変化させた。そして1860年頃、マネとボードレールは親密な関係になったが、友人に対して影響力を保ったのはマネの方である。（Proust 1913 : 39）

◎ボードレール「^{エッチング}腐蝕銅版画は流行中」*« L'eau-forte est à la mode »*（1862年4月〈逸話評論〉誌 *Revue anecdotique*）で初めてマネの名前を出す。

アンドレ・ジャンロン、リボ、マネの諸氏もまた、腐蝕銅版画の試作数点をこころみたところであり、それらもまたカダール氏がガリシユリユー通りの彼の店の陳列窓に請じ入れるところとなった。（OC II, 736）

◎ボードレール「画家たちと腐蝕銅版画家たち」*« Peintres et Aquafortistes »*（1862年9月14日〈ブールヴァール〉誌 *Le Boulevard*）で、ドラクロワ、クールベの名前に続いて、マネとルグロの名前を挙げる。これは、ボードレールが美術批評の中でマネについて書いている唯一の文章である。

マネ氏はこの前のサロン（官展）で激しいセンセーションを呼び起こした《ギター弾き》の作者である。次の官展では、最も強烈なスペインの風味を帯びた彼のタブローが何点も見られることだろうが、これには、スペイン精神がフランスに逃げ込んだのではないかと思わせるものがある。マ

ネ、ルグロ両氏は、現実、すなわち現代の現実に対する断固たる嗜好をもち、—これだけでもすでに良い徴候なのだが—、この嗜好に、活発、また広闊で、敏感で、大胆な想像力を結びつけているのであって、この想像力というものなしには、この上もなく優れた諸能力のすべても、主人なしの召使い、政府なしの官吏にすぎないと、ぜひとも言うておく必要がある。(OC II : 738)

◎ 1862年(夏～秋?)、《テュイルリーの音楽会》*La Musique aux Tuileries*で、マネはボードレルの姿を描く。(1863年3月にマルティネ画廊で展示)。(Paris 1983 : n° 38)

◆アントナン・プルーストによれば、マネがテュイルリー庭園にスケッチに行くときには、ボードレルはつねに同行した。

マネが、遊んでいる子供と椅子にくつろいだ付添いの女たちを、戸外の木々の下で習作するためにテュイルリー庭園へ行くたびに、ボードレルはいつも彼に同伴した。キャンバスをひろげ、パレットを手にして、あたかも自分のアトリエにいるかのように落ち着いて仕事をしているエレガントな画家を、散策者たちは物珍しそうに振り返って眺めた。(Proust 1913 : 39)

◎ 1862年、マネ《帽子をかぶった横顔のボードレル》*Baudelaire en chapeau, au profil*、エッチング。(Paris 1983 : n° 54-55)

・2種類のエッチングがある。1868年にアスリノーが出版する詩人の伝記に、もう1点の詩人の肖像《無帽の正面像のボードレル》(こちらはナダールの写真に基づいたエッチング)とともに掲載される。マネは1867-68年にふたたびこれらのエッチングを制作したと思われる。

◎ 1862年、マネ《横たわるボードレルの愛人(ジャンヌ・デュヴァルの肖像)》

La maîtresse de Baudelaire, couchée (Portrait de Jeanne Duval), 油彩、および水彩。(Paris 1983 : n^{os} 54-55)

・ジャンヌ・デュヴァル（またはルメール、またはプロスペール）は、黒人の血が2分の1または4分の1の混血女性。1838-39年頃、ポルト＝サン＝マルタン座で端役をしていた。その頃はナダールの愛人だったといわれる。ボードレールが彼女と知り合ったのは、インド洋への船旅から戻ってきてから、1842年のことだと思われる（以上 *CPI* II）。ジャンヌは1859年春頃、突然、麻痺の状態となり、デュボワの療養所（Maison Dubois）に入る。ボードレールは彼女の療養費を工面する。（Tabarant : 261）

・この油彩はマネの死後、アトリエに残っていた。一時はボードレールの所有であった可能性は皆無ではない。というのは、詩人が1866-67年にパリで入院していたとき、病室には「2枚のマネの絵」があったと言われるからである。詩人の死後、借金返済の一部として、マネに返却された可能性もある。しかし、おそらくこの絵はボードレールの気にいらなかった可能性が高い。マネは生涯を通じて、自分の絵を友人にたやすくプレゼントすることが多かったからである。（Paris 1983 : 96-98）

・ジャンヌもしくは他の女性を描いたボードレール自身のデッサン（《アスリノーのための女性》《ポール・シュナヴァールに捧げる古代の美女の見本》など）との類似が指摘されている。（Paris 2011 : 144）

◎ 1862年、マネ《ローラ・ド・ヴァランス》*Lola de Valence*、油彩。（Paris 1983 : n^o 50）

・デッサン、エッチングもある。（Paris 1983 : n^{os} 51-53）

・ローラ・ド・ヴァランスは、1862年8月12日から11月2日まで、パリの競馬場（l' Hippodrome）で公演したマドリッド王立劇場舞踊団の女性中心ダンサー。ボードレールはマネのアトリエでこの絵を見た後、有名な4行詩をマネに献呈する（1866年、『漂着物』*Les Epaves* に収録）。

いたるところに出逢う、かくも多くの美女の間で、
欲念の揺れ惑うことは、友らよ、僕も理解する。
しかし、見たまえ、ローラ・ド・ヴァランスのうちに燦めく、
薔薇色と黒の宝石の、思いもかけぬ魅惑を。(OCI:168)

- ・手稿には、次のようなボードレールの指示が書かれている。

小さな折衷書体で彫ること。

綴りと句読点、4本線でマークしている大文字に注意すること。これらの詩句を肖像画の下に、絵の具の上に筆か、額縁の上かに、黒字で書いてもいいかもしれない。(OCI:1149)

- ・1863年のある戯画 (Paris 1983:148, fig.e) によって、1863年の2月のマルティネ画廊での展示の際に、マネは油彩の額縁の上にこの詩を書いた装飾枠をつけていたことがわかる。

- ・『漂着物』(1866)に収録されたとき、ボードレールは以下の注を付けている。

これらの詩句は、エドゥアール・マネ氏による、スペインの舞姫ローラ嬢のすばらしい肖像画、同じ画家のすべてのタブローの例に漏れず、一騒動を巻き起こした肖像画の銘として制作された。—シャルル・ボードレール氏のミューズは、大方から非常に胡散臭い目で見られているので、今回も「薔薇色と黒の宝石」に卑猥な意味を見出そうとする酒場批評の連中がいた。われわれは、詩人はただ、暗鬱であると同時に浮かれてもいる美女 (une beauté, d'un caractère à la fois ténébreux et folâtre) が、薔薇色と黒色の結合を夢想させたと言いたかっただけなのだと思えるものである。(刊行

者の注⁹。) (OC I: 168)

・ゾラは1867年に《ローラ・ド・ヴァランス》について「シャルル・ボードレールの4行詩によって有名だが、詩の方もタブローと同じくらい非難され、ひどい扱いを受けた」と書いている。そして、4行詩を引用した後、次のように述べる。「私はこの詩の弁護をするつもりはないが、私にとってこの詩は、マネという芸術家の個性全体の、韻文の形をとった批評であるという大きな長所を持っている。私はテキストを強引に解釈しているのかもしれない。だが、《ローラ・ド・ヴァランス》が薔薇色と黒の宝石であるというのは完全に真実だ。画家はすでに、色斑によってのみ処理しており、彼のスペイン女は強烈な色彩対比によって、大胆に描かれている。絵全体は二つの色調で被われている¹⁰。」上記のボードレールによる注においては「薔薇色と黒色」という色彩が、「暗鬱で浮かれた」という踊り子の性格に結びつけられていたが、ゾラは純粋な色彩の対比へと還元している。

◆ 1863年1月4日、ボードレールからマネへ、1000フランの借金証書。(現存する最初の手紙、テキストはなし) (CPI II: 286)

◆ 1863年2月、マネはマルティネ画廊で、《サクランボを持つ少年》《テュイルリーの音楽会》《少年と犬》《本を読む人》《剣を持つ少年》《老音楽師》《街の女歌手》《スペインのバレエ》《スペインの衣装をつけた横たわる若い女性》《ローラ・ド・ヴァランス》を展示。(Tabarant1963: 313)

◆ 1863年3月14日、ボードレールからオーギュスト・ド・シャティヨン(画家、版画家、シャンソン詩人)への手紙の中で、翌朝の11時にホテルに昼食に来るように誘い、マネも来るので紹介すると書く。手紙の中ではじめてマネの名前が出てくる。(CPI II: 294)

◆ 1863年3月28日、ボードレールからマネの母親への手紙。招待への礼状。

ご親切なご招待にあずかり、深謝申し上げます。ご令息に対する私の気持ちといっても、ご存じのように、私のような者が申し上げる資格はありません。このことについて仰って下さったことは、光栄の至りです。と言いますのも、あの方の性格を、あの方の才能と同じくらい愛さないではいられませんから。(CPI II : 296)

◆ 1863年10月6日、ボードレールから写真家カルジャへの手紙。マネから写真(カルジャが撮影したボードレールの肖像写真)を見せてもらい、それをマネがブラックモンの所へ持って行ったことを知らせる。マネの結婚に驚く。

マネが先ほど、まったく思いがけない知らせを告げてきました。今夜オランダに向けて出発し、そこから彼の妻を連れて帰ってくるというのです。しかし、彼にもいくらか弁解の余地はあります。というのも彼の妻は美人で、とても善良で、しかもとても立派な芸術家だそうです。女性一人の内これほどの宝があるとは、怪物的(monstrueux)ではありませんか?(強調ボードレール)(CPI II : 323)

◎ 1863年10月、《ローラ・ド・ヴァランス》(1862)にボードレールが4行詩をつけたマネのエッチングが腐蝕銅版画家協会の第67番頒布作品として刊行される。

◎ 1863年11月26日、29日、12月3日、ボードレールは〈フィガロ〉紙に「現代生活の画家」« Le Peintre de la vie moderne »を発表。(執筆は1859年～60年頃と考えられる。)

◎ 1864年2月7日、〈フィガロ〉紙に、ボードレールがマネに捧げた散文詩「紐」« La Corde »が発表される。

◆ 1864年3月、ボードレールはフィリップ・ド・シェヌヴィエール侯爵(バ

イイ寮 Pension Bailly¹¹の友人。美術館行政の道を歩み、美術長官（directeur des Beaux-Arts）となる）に宛てて、以下のように書く。

展覧会の季節となりました。私の友人たちの二人、マネ氏とファンタン氏を強く推薦したいのですが、その内の一人は、すでにご好意の恩恵にあずかっています。マネ氏は、《闘牛のエピソード》と《天使たちに付き添われ、復活するキリスト》を出品します。

ファンタン氏は、《故ウージェーヌ・ドラクロワへのオマージュ》と《ヴェニヌスベルグのタンホイザー》を出品します。これらのタブローにはどんな素晴らしい才能が現れているかがご覧いただけるでしょう。そして、それらがいかなるカテゴリーに入れられるにせよ、良い場所かけられるよう、できる限りのご配慮をお願いします。（CPI II : 350-351）

・3月22日のファンタン宛ての手紙では、シェヌヴィエールへ手紙を書いて、彼の絵とマネの絵を良い場所に掛けるように推薦したことを述べて、「自分はうまくやったと思う。なぜなら、マネの絵を運んできた人たちが到着したとき、シェヌヴィエールがすぐに作品を見せるように頼んだから」（CPI II : 351）と書いている。

◆ [1864年4月初め]、マネへの手紙。1864年のサロンにマネが出品した《死んだキリストと天使たち》について、キリストの胸の傷が左側になっていることについて、聖書では右側になっていると注意を促す。

あなたと一緒に飲むように命じられたアモンティリヤードがあります¹²。
今夜、母上に夕食に行くことをお許し願えるでしょうか。

ところで、確かに槍は右胸に刺されたようです。サロン開幕の前に、傷の場所を変えにいく必要があります。とにかく4つの福音書で確かめて見

て下さい。意地の悪い連中に笑いの種を提供しないように気をつけな
いけません。(CPI II : 352)

◆ 1864年4月末に、ボードレールは負債に追われ、パリからブリュッセルに
移る。

◎ 1864年のサロンに、マネの《闘牛のエピソード》と《死んだキリストと天
使たち》が出品される。(Paris 1983 : n^{os} 73-75)

・このサロンにはファンタン＝ラトゥールの《ドラクロワへのオマージュ》(オ
ルセー美術館)も出品された。前列右端にボードレール、後列右から3人目に
マネが描かれている。

◆ 1864年5月27日、ブリュッセルのボードレールからマネへの手紙。

ご親切な手紙に感謝します。母上と奥様にどうかよろしくお伝え下さい。
そして、あなたのタブローの運命¹³について嬉しい知らせを教えてもらえ
るなら、手紙を書いて下さい。お祝いの返事を書きます。

ベルギー人は愚かで嘘つきで泥棒です。私はじつに恥知らずな詐欺の被害
に遭いました。ここでは、人を騙すことが決まりであり、不名誉なこと
ではないのです。私はそのためにここにやって来た大きな仕事にはまだ取
りかかっていませんが、私の身に起こることはみな、悪い徴候ばかりです。
—私がこちらではフランス警察の回し者だと思われていることをさしておい
たとしても。—ベルギー人の人の良さについて話す人がいても決して信
じてはいけません。策略、猜疑心、うわべだけの愛想良さ、粗野、腹黒さ
については、その通りです。(CPI II : 370)

◆ 1864年6月20日頃、テオフィル・トレへの手紙。トレが〈ベルギー独立〉
紙 *Indépendance belge* の6月15日夕刊と16日朝刊で、パリのサロン評を書き、

そこでマネを評価したことへの礼状。ただしトレが、マネはベラスケスとゴヤとグレコをパスティッシュしたと書いたことに反論。

このたびは、私の友人エドゥアール・マネ擁護の筆をとり、いささかなりとも彼を正当に評価することで、私を喜ばせて下さったことに感謝いたします。ただ、あなたが表明されたご意見の中で、小さなことですが訂正すべき点がいくつかあります。

マネ氏のことを、皆は頭のおかしい狂った人物だと思っていますが、実際はごく誠実で、ごく単純な人間です。分別のある人間であろうとできる限りの努力をしているのですが、不運にも、生まれながらにしてロマン主義の刻印を押されているのです。

模作（パスティッシュ）という言葉は正当ではありません。マネ氏はかつてゴヤを見たことはなく、グレコを見たこともありません。マネ氏はかつてプールのタレス画廊を見たことがないのです。あなたには信じられないと思えるでしょうが、真実なのです。

私自身、こうした不可思議な一致を見て感嘆の念を覚えたのです。

あの素晴らしいスペイン美術館を、愚かなフランス共和政は所有権の誤った尊重により、オルレアン家の王族に返還してしまいましたが、我々があの美術館を享受していた時代には、マネ氏はまだ子供で、船での任務についていたのです。

彼がゴヤの模作をしているとあまりに何度も言われるので、今では彼もゴヤの作品を見ようとしています。

彼がベラスケスを何枚か見たことがあるのは本当です。どこでかは知りませんが。

私が本当のことを言っていないとお思いですか？ そのような驚くべき幾何学的平行性が、自然界に出現しうるのだということを疑っておられま

すか。それでしたら、申し上げます。私はエドガー・ポーを模倣していると非難されます！ どうして私が、これほど忍耐強くポーを翻訳したかご存じですか。なぜなら彼は私に似ていたからです。彼の本をはじめて開いたとき、私は自分が夢見た主題ばかりでなく、自分が考えた「文章」が、20年前に彼によって書かれているのを見て、たいへん驚き、また有頂天になったのです。

[...] あなたがマネの力になってやろうとして下さるたびに、私はあなたに感謝するでしょう。

[...] 私は自分が望むことをする勇気を、あるいはむしろ絶対的な臆面のなさを持つでしょう。私の手紙を、少なくともその数行を引用して下さい。私が申し上げたのはまったくの真実です。(強調ボードレル) (CPI II : 386-7)

◎ 1864年11月1日、〈芸術家〉誌 *L'Artiste* に「紐」の第2版を発表。マネへの献辞はない。

◆ 1865年2月10日頃、ボードレルからマネへの手紙（現存せず、マネからの返事あり）

◆ 1865年2月14日、マネからボードレルへの手紙。(LAB : 230-232)

◆ 1865年3月23日頃、ボードレルからマネへの手紙（現存せず、マネからの返事あり）

◆ 上記に同封して、ゴージェエにマネを推薦する手紙。（現存せず）

◆ 1865年3月25日頃、マネからボードレルへの手紙。

親愛なるボードレル、あなたは賢者です。私が悲観にくれていたのは間違いでした。私があなたに手紙を書いていたとき、私のタブローは入選していたのです。私のところにやってくる噂によれば、今年はそれほど悪

くはならないでしょう。それは《兵士たちに侮辱されるキリスト》です。このような主題に取り組むことはこれが最後だろうと思います。しかし、あなたはテオフィル・ゴージェが審査委員会のメンバーだったことをご存じないのですか。私は彼にあなたのお手紙を送りませんでした。今となつては必要なかったのです。必要のないときに良い推薦状を使うことはありません。

最近、かなり驚いたことがありました。エルネスト・シェノー氏¹⁴が私のタブローを1枚、買ってくれたのです。花瓶に挿した2本の花の絵で、私がカダールの店で展示した取るに足りない小品です。おそらくそれは私に幸運をもたらしてくれるでしょう。

『マリー・ロジェの謎』を読み終えたところです。というのも、私は本を最後から読み始めたからです。私にはいつもこうした好奇心があります。あの馬鹿なヴィルメッサンがこれを掲載しようとしなかったのは驚きです。これは素晴らしく、また面白いです。(LAB: 232-233)

◆ 1865年5月初め、マネからボードレールへの手紙。

親愛なるボードレール、あなたがここにいて下さればと思います。罵詈雑言が雨あられと降りそそぎ、私はかつてこんな素晴らしい目に遭わされたことはありません。きっとヴェルウエ¹⁵があなたにその様子を話してくれることでしょう。彼もサロンに2点の注目すべきタブローを出品して、良い評判を得ていましたから。

私のタブローについてのあなたのまともなご判断がいただきたかったです。というのも、こうした非難の声のすべてが私を苛立たせるからで、誰かが間違っているのは明らかだからです。ファンタンは親切でした。今年彼が送ったタブローは、素晴らしい所がたくさんありますが、去年のタブ

ローほど強い印象は与えなかつただけに（もっとも彼にはそのことがよくわかっていました）、彼が私を擁護してくれるのは立派なことなのです¹⁶。

そちらでの滞在が長引いて、きっと疲れていらっしゃるでしょう。早く戻ってきていただきたいです。これはこちらにいるあなたの友人皆の願いです。

ルメールとの問題は進んでいますか？ フランスの新聞や雑誌がもっとあなたの作品を載せてくれるといいのですが。この一年の間にお書きになったものがあるでしょうから。

ロンドンでは、アカデミーが私のタブローを拒絶しました¹⁷。

さようなら、親しい友よ、握手を送ります。(LAB: 233-234)

◆ 1865年5月11日、ボードレールからマネへの手紙（上記の手紙への返事）。有名な「あなたは、あなたの芸術の老衰のなかでの第一人者にすぎない」(*vous n'êtes que le premier dans la décrépitude de votre art*)（強調ボードレール）という文章を含む。

親愛なる友、親切なお手紙に感謝します。シオルネール Chorner 氏¹⁸が今朝、楽譜と一緒に届けてくれました。

ロップスにお会いになっても、田舎者丸出しの様子はあまり気にかけないで下さい。ロップスはあなたが好きです。ロップスはあなたの知性の価値を理解していますし、あなたを憎んでいる人々（というのも、どうやらあなたは人に憎しみを引き起こすという榮譽をお持ちのようなので）について彼が観察したところを私に打ち明けさせしてくれたのです。ロップスは私がベルギーで見出したただ一人の真の芸術家（芸術家という言葉を、私が、おそらく私だけが理解している意味において）、真の芸術家です。

さて私は、またしてもあなたのことをあなたに語らなければなりません。

あなたの価値をあなたに示してみせなければならぬのです。あなたが求めているのはまったく馬鹿げたことです。嘲弄的にされている、からかいの言葉に苛立つ、人々には正当な評価をする能力がない、等々、等々。あなたは、自分がそういう状況に立たされた最初の人間だとでも言うのですか？ あなたは、シャトーブリアンやワーグナーよりも才能があるというのですか？ しかし、彼らだっつていぶん嘲弄されたではありませんか？ 彼らはそのために死んだりはしませんでした。あなたがあまり慢心しすぎないために私が言いたいのは、この人たちは、各自が自分のジャンルにおいて、しかもきわめて豊かな一世界の中で、それぞれ亀鑑であるのに対し、あなたは、あなたの芸術の老衰のなかでの第一人者にすぎない、ということです。私があなたにこうした無遠慮な (*sans-façon*) 言い方をするのを恨まないで下さい。あなたに対する友情はよくご存じの通りです。 [...]

[...] 彼 [マネの手紙を持ってきてくれたベルギーの作曲家のショルネール] が私に言ったことは、私があなたについて知っていることや何人かの才知ある人々があなたについて言っていることと一致しています。「欠陥もあり、弱点もあり、不安定なところもあるが、抵抗できない魅力がある。」私はそんなことを全部知っています。私はそれを理解した最初の1人です。彼はヌードの女性を黒人女と猫と一緒に描いた絵（しかしそれはほんとうに猫なんですか？）の方が、宗教画よりもずっと優れていると付け加えました。

[...] こちらで『哀れなベルギー』を仕上げることは、私にはとてもその力がありません。私は衰弱して、死んでしまっています。二、三の雑誌に掲載すべき『散文詩』を山とかかえています。もうこれ以上先には進めません。子供の頃、世界の果てで暮らしていた時のように、実体のない病気に苦しんでいるのです¹⁹。愛国主義者でもないのに。（強調ボードレー

ル) (CPI II : 496-7)

- ◆ 1865年5月24日、ポール・ムーリス夫人への手紙。ムーリス夫人が「私は果敢にもマネを擁護しているのです、毎日、あらゆる人々から侮辱を受けています」と書いてきたのに対する返事。

マネにお会いになったら、次のことを伝えて下さい。小さなもしくは大きな業火、嘲弄、侮辱、不当といったものは、すばらしい事柄で、もし不当さに対して感謝しないなら、恩知らずということになるでしょう。彼が私の理論をなかなか理解できないことはよくわかります。画家たちというのは、いつもすぐに成功が訪れないと気が済まないのです。でも本当に、マネには非常に輝かしい軽やかな才能があるので、気を落としてしまったら可哀想です。彼は決して、その気質の欠陥を克服することはないでしょう。でも彼には気質(*tempérament*)があります。それが重要なことなのです。それに彼は、不当さが増せば増すほど、状況が改善されるということに気がついていないようです——もっともその前に、彼の頭がおかしくならぬ限りはということですが(あなたはこうしたことすべてを、快活な調子で、彼を傷つけないようにおっしゃるすべを心得ておられるでしょう)。(強調ボードレル) (CPI II : 500-501)

- ◆ 1865年5月25日、シャンフルーリへの手紙。

マネは強い才能を持っています、もちこたえるであろう才能を。しかし性格が弱いのです。衝撃に意気消沈し、呆然としているように思えます。その上、私がとても気になるのは、馬鹿な連中が皆、彼はもうお終いだと思っていて喜んでいることです。(CPI II : 502)

- ◆ 1865年7月、ボードレールはプーレ＝マラシへの借金の一部を返済する必要に迫られたとき、マネから500フランを借りる。(PZ)
- ◆ 1865年8月9日、ボードレールからジュリアン・ルメールへの手紙。

夜にときどきカフェ・ド・バードにいらっしゃるのなら、マネに私からよろしくお伝え下さい。—そして、私に知らせることなくスペインに行かないでほしいと思っていることを彼に伝えてください。(CPI II, 523)

・カフェ・ド・バードはイタリアン大通り26番地。1859年に閉店した「ディヴァン・ル・ペルティエ」Le Divan Le Peletierの客の一部を引き継いだと言われる。フェリックス・レガメーがそこでボードレールの肖像を描いたことから、ボードレールも訪れていたことがわかる。マネが1866年5月8日に、前日の〈エヴェヌヌマン〉紙で彼をはじめ大々的に擁護してくれたゾラへの礼状の中で自分は毎日、5時半から7時まで、カフェ・ド・バードにいと書いている。

- ◆ 1865年9月5日、シュザンヌ・マネからボードレールへの手紙。(LAB : 235)
- ◆ 1865年9月14日、マネからボードレールへの手紙。スペイン旅行の報告。

親愛なるボードレール、昨日マドリッドからこちらにやってきたところです。妻があなたの手紙を渡してくれました。[…]

残念ながらクールベによるあなたの肖像画²⁰の所有者となることはできません。大変残念ですが、ルジョーヌには可能だし、彼もそうしたいと思うことでしょう。パリに戻ったら、必ず彼に話してみます。そのことについて彼に手紙を書いて下さることをお勧めします。

ようやく、私はベラスケスを知り、かつて存在したなかでもっとも偉大な画家だとあなたに断言します。私はマドリッドで彼の絵を 30～40 点見ました。肖像画もあればタブローもありましたが、すべてが傑作です。彼は評判以上の画家で、彼の絵を見るだけでも、疲れや幻滅の避けられないスペイン旅行に値します。ゴヤも非常に興味深いものを見ました。何枚かはじつに美しく、中でもマハの衣装を着たアルパ公爵夫人の肖像は信じられないほど魅力的でした。

人が目にするのできるもっとも美しく、もっとも興味深く、またもっとも恐ろしい見世物は闘牛です。私は帰ったら、自分の見た闘牛のきらきらした、輝かしいと同時にドラマティックな様相を画布に描きたいと思っています。そして、毎晩マドリッドの最もきれいな女性たちが、みなマンティエラを頭にかぶって集まってくる「プラド」も。しかし、この国には目に大きな喜びを与えてくれるものはありますが、胃袋には責め苦です。テーブルに着くと、食べたいというよりはむしろ吐きたくくなります。—私はステヴァンスとシャンフルーリを待った後、一人で出発しなければなりませんでした。これから先、私は大通りを渡るためでさえ、決して当てにはすまいと思う人がまた二人できました。

さようなら、親愛なるボードレル、友情を送ります。そして信じていただきたいのですが、あなたの仕事はあなたにしか、うまくはできないでしょう。他の人たちを当てにしないで下さい。あなたがそのいまましい国にいらっしやる限り、いいことは何も起こらないでしょう。

敬具。(LAB : 236-237)

- ◆ 1865 年 10 月 25 日頃、マネからボードレルへの手紙。(LAB : 237-238)
- ◆ 1865 年 10 月 28 日、ボードレルからマネへの手紙 (残存する最後のもの)。
・マネがコレラに罹ったという知らせに驚く。

あなたの手紙の最初の数行は私を身震いさせました。私がこんな風に言う人は、フランスに10人も、一ええ、確かに10人もいません。(CPI II : 538)

- ・自分の身体の不調を打ち明ける。

私はルメールに目次を送るつもりです。[...]彼を少し待たせているのは、あの忌まわしい神経痛にまた襲われたからです。この災いは歳とともにひどくなります。以前は腕か脚だけだったのですが、今ではときどき胸や頭を襲うこともあるのです。(CPI II : 538)

- ・ユゴーがその新刊の詩集『街路と森の歌』の献辞に「シャルル・ボードレーヘ、我ラ右手ヲ結び合ワサン」(à Charles Baudelaire, *jungamus dextras*)と書いてきたことについて次のように述べる。

これは、お互いに固い握手をしましょうという意味だけではありません。私はV・ユゴーのラテン語の言外の意味を知っています。それはまた、「人類を救うために」手を握りましょうという意味でもあるのです。しかし、私には人類などどうでもいいのです。しかも、彼はそのことに気づかないのです。

親愛なるマネ、多くの物事について、あなたには内々に書いているということがおわかりでしょう—ですから、ムーリス夫人にお会いになっても、彼女の信念を悲しませる必要はありません。かつては生きることに歓びを持っていたであろうあの素晴らしい女性は、ご存じのように、民主主義の中に陥落したのです。蝶がゼラチンに捕らえられるように。(強調ボード

レール) (*CPI* II : 538-9)

◆ 1866年3月中頃(15日?)、ボードレールはベルギーのナミュールのサン＝ルー教会で倒れる。すぐにブリュッセルに連れ戻されたが、3月30日から31日にかけて病状は急激に悪化し、失語症と半身不随の状態になる。6月末にパリに戻り、7月初めから凱旋門近くのエミール・デュヴァル博士の病院に入り、そこで67年8月31日に亡くなるまで1年あまりを過ごす。

◆ まだボードレールがブリュッセルにいるときに、マネからプーレ＝マラシに宛てて、ボードレールの様子を尋ねる手紙がある。(PZ : 581-582)

◆ 1866年8月15日、シャンフルーリからプーレ＝マラシへの手紙。ポール・ムーリス夫人に、病院に行ってピアノを弾いてはどうかと提案したことを知らせている。

勇敢にもムーリス夫人は『タンホイザー』の楽譜を持って行きました。その効果は、私が期待したとおりでした。私はその場に立ち会ってはいませんが、ムーリス夫人はボードレールが強い印象を受けたことを私に話してくれました。残念ながら彼女は海岸に出発してしまったところです。マネ夫人も同様です。彼女の代わりにしてくれるように頼むこともできたのですが。ボードレールは秋の終わりまで、音楽なしで過ごすことになるでしょう。(PZ : 582)

◆ 1867年1月21日、ジュール・トゥルバ(1861年以来、サント＝ブーヴの秘書)からプーレ＝マラシへの手紙。

私は一度だけボードレールに会いました。[...]それはかつてのボードレールの影でしたが、相変わらず似ていました。私がある画家の名前を出すと、

烈火の如く怒りを表しました（以前とまったく同じように）。けれどもリヒルト・ヴァーグナーとマネの話をする、彼は嬉しそうに微笑みました。（PZ : 585）

◆1867年7月20日、ボードレールの母オーピック夫人からアスリノーへの手紙。

シャルルは画家のマネさんに会いたがっています。残念ながら私は住所を知らない、マネさんに手紙を書いて、友人が大声でお名前を呼んでいることを知らせることができないのです。（PZ : 582）

◆1867年8月31日、ボードレール死去。

◆1867年～1868年、マネからアスリノーへの手紙。準備中のボードレールの作品集に自分の制作した肖像画を使って欲しいという希望を述べる。

親愛なるアスリノー

目下、ボードレールの著作集をご準備の最中ではありませんか。『パリの憂鬱』の初めに、肖像画を入れるおつもりなら、私は帽子をかぶったボードレール、要するに散歩者のボードレールの肖像を持っています。この書物の最初に置くのに悪くはないでしょう。他にももうひとつあります。無帽で、より重々しい肖像で、こちらは詩集に適しているでしょう。— 私はこの仕事を任せてもらいたくてたまらないのです。— もちろん、この提案をすることで、私は原版を無償で提供するつもりです。（Paris 1983 : 158）

・マネが意図していたのは、1868年から1870年にかけて、アスリノーとバンヴィルの編纂によりミシェル・レヴィ書店から刊行された『ボードレール全集』全

7巻のことだと思われる。しかし、マネのエッチング2点《帽子をかぶった横顔のボードレール》(Paris 1983 : n° 55) と《無帽の正面像のボードレール》(Paris 1983 : n° 58) が用いられたのは、1869年1月に出版されたシャルル・アスリノーの『シャルル・ボードレール、生涯と作品』(ルメール書店)の冒頭であった。マネはボードレールの散文詩集を『パリの憂鬱』と呼んでいることにも注目したい(前記の『全集』では『小散文詩』となっている)。

主要参考文献と略号

CPI I ~ II : Baudelaire, Charles, *Correspondance*, éd. Claude Pichois, 2vols., Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1973.

LAB : *Lettres à Baudelaire*, publiées par Claude Pichois, Neuchâtel, A la Baconnière, 1973.

OCI I ~ II : Baudelaire, Charles, *Œuvres complètes*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2vols., 1975-76.

Paris 1983 : *Manet 1832-1883*, cat.exp., par Françoise Cachin, *et al*, Paris : Grand Palais / New York : Metropolitan Museum, 1983

Paris 2011 : *Manet, inventeur du moderne*, cat.exp., Paris : Musée d'Orsay, Réunion des musées nationaux, 2011

- Proust 1897 : Proust, Antonin, *Edouard Manet : Souvenirs*, publié initialement dans *La Revue blanche* de février à mai 1897; Paris, L'Echoppe, 2^e éd., 1996.
- Proust 1913 : *Edouard Manet : Souvenirs*, éd. par A. Barthélemy, Paris, H. Laurens, 1913.
- PZ : Claude Pichois, Jean Ziegler, *Baudelaire*, Julliard, 1987.
- Tabarant 1962 : A. Tabarant, *La vie artistique au temps de Baudelaire*, Mercure de France, 1962.

(よしだ・のりこ 芸術文化論)

謝辞

本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（一般）、課題番号 16K02535、研究課題名「近代芸術形成期における文学と絵画の協働に関する研究」（平成 28 年度～平成 30 年度、研究代表者：吉田典子）の研究成果の一部である。

注

- 1 アドルフ・タバラン（Adolphe Tabarant, 1863-1950）は、社会主義・無政府主義のジャーナリスト・作家で、美術史家としても活躍し、親しかったピサロをはじめ、印象派やエコール・ド・パリの画家たちの展覧会や作品研究を多く手がけた。とりわけマネについては、遺産相続者のレオン・レーンホフからさまざまな資料提供を受

け、1931年にマネの油彩の作品カタログ (*Manet : histoire catalographique*, Editions Montaigne)、1947年にマネの生涯と作品についての大著 (*Manet et ses œuvres*, Gallimard, 600 p.)を著している。彼はまた、1942年に、ボードレールを中心とした『ボードレールの時代の芸術生活』 (*La vie artistique au temps de Baudelaire (1840-1867)*, Mercure de France)を上梓しており、本稿では1963年に出版されたその第二版を使用している。タバランは自身の記述の出典を個々に明示することはしていないため、その記述が資料に基づくものなのか、それとも彼個人の見解なのか区別することは難しい。しかし、タバランがマネの資料研究の第一人者であり、現在でも彼の著作が一定の有効性を持っていることは間違いない。

- 2 Stéphane Guérin, « Le moment Baudelaire », in *Manet, inventeur du moderne*, cat. exp., Paris : Musée d'Orsay, Réunion des musées nationaux, 2011, pp. 135-138.
- 3 吉田典子「ボードレールとマネ—散文詩『紐』を中心に」、マリアヌス・シモン＝及川編『テキストとイメージ—アヌ＝マリー・クリスタンへのオマージュ』所収、水声社、2018年6月、33-61頁。
- 4 Pierre Bourdieu, *Manet : une révolution symbolique*, Raisons d'agir / Seuil, 2013, pp. 466-468.
- 5 Rôtisserie Pavard. ノートル＝ダム・ド・ロレット通り 60番地 (9区) にあったロースト肉のレストラン。
- 6 この前の部分で、クーチュールのアトリエで雇われていた職業モデルの男性に、マネが大げさなポーズではなく、一部服を着けたまま比較的自然なポーズをさせたのを見て、師匠のクーチュールが「あなたはあなたの時代のドーミエにしかたれない」と言ったことを受けている。アントワヌ・コワベル (Antoine Coyvel, 1661-1722) は、ヴェルサイユ宮殿の礼拝堂天井壁画をはじめ、王族から多くの公式注文を受けて成功した画家。1716年に「国王の第一画家」に任命された。
- 7 Restaurant Dinochau. アンリ＝モニエ通り (旧ブレダ通り) 16番地 (9区)、ナヴァール通りとの角にあったレストラン。
- 8 Divan Le Peletier. パッサージュ・ド・ロペラル・ベルティエ通り側の出口にあった店 (9区)。1859年に閉店した。
- 9 この注は、校正刷りにボードレールの自筆で書き加えられている。
- 10 Emile ZOLA, *Édouard Manet, étude biographique et critique*, 1867, in *Ecrits sur l'art*, édition établie, présentée et annotée par Jean-Pierre Leduc-Adine, Gallimard, coll. « tel », 1991, p. 157.
- 11 ボードレールは、1839年、18歳の時に、パリのルイ＝ル＝グラン高校を退学になったあと、バカロレアにしろろじて合格し、パリ大学法学部に1839年から1840年7月

- まで籍を置く。パンテオン近くのバイイ寮にいた文学青年たちと交遊する。ここは地方出身の地主貴族の子弟が多く住んでおり、シェヌヴィエールもその一人。
- 12 「アモンティリヤード」は、スペインのヘレス地方産の甘味シェリー酒。ポーの短編に『アモンティリヤードの酒樽』という作品がある。誰がそれを飲むことを「命じたのかについては不明。
 - 13 1864年のサロンに出品した2枚の絵を指す。
 - 14 美術批評家。1869年に美術視察官 (Inspecteur des Beaux-Arts) となる。1865年のサロン評では、《オランピア》を批判した批評家たちの一人。
 - 15 ベルギー人の画家。ボードレールの『哀れなベルギー』などにその名前がある。1865年のサロンには、《バラ色の農場》と《果樹園》という作品を出品していた。
 - 16 ファンタン＝ラトゥールが1865年のサロンに出品したのは《乾杯 (真実へのオマージュ)》と題された集団肖像画であったが、サロン終了後に作者自身がこの作品を破棄し、三つの肖像画断片だけが残った。この作品については、三浦篤『近代芸術家の表象』東京大学出版会、2006年、85-144頁。ファンタンが1864年のサロンに出したのは、マネやボードレールも描かれている有名な集団肖像画《ドラクロワへのオマージュ》(オルセー美術館)であった。
 - 17 イギリスでも王立アカデミーが毎年サロンを開催していた。
 - 18 ベルギー人の作曲家。
 - 19 *CPI* IIの注釈によれば、パリへのホームシック。ボードレールはリヨンで過ごした中学時代にそれで苦しみ、また南洋航海中もパリへの郷愁を覚えていた。ベルギーでも同様である。
 - 20 1847年にクールベが制作したボードレールの肖像画を、1859年に画家から買ったのはブーレ＝マラシである。ブーレ＝マラシは1874年までその絵を所有していた。ブーレ＝マラシからその絵を買ったのはアルフレッド・ブリュイヤスであり、その後はモンペリエのファーブル美術館に遺贈された。